

粟田あはたの讚岐守兼房さぬきのかみかねふさといふ人ありけり。年ごろ、和歌を好

みけれど、よろしき歌もよみ出ださざりければ、心につ

ねに(注1)人麻呂を念じけるに、ある夜の夢に、(注2)西

坂本とおぼゆる所に、木はなくて、梅の花ばかり雪のご

とく散りて、いみじくかうば芳しかりける、心にめでたしと

思ふほどに、かたはらに年高き人あり。直衣に薄色の指

貫、紅の下の袴を着て、なえたる烏帽子をして、烏帽子

の尻、いと高くて、常の人にも似ざりけり。左の手に紙

をもて、右の手に筆を染めて、ものを案ずるけしきなり。

あやしくて、「たれ人にか」と思ふほどに、この人いふ

やう、「年ごろ、人麻呂を心に懸け給へる、その志深き

によつて、形を見え奉る」とばかりいひて、かきけつや

うに失せぬ。

夢覚めてのち、朝に絵師を呼びて、このありさまを語

りて、書かせけれど、似ざりければ、たびたび書かせて、

似たりけるを、宝にしてつねに礼しければ、その験にや

ありけむ、さきよりもよろしき歌よまれけり。年ごろあ

りて、死なむとしける時、(注3)白河院にまゐらせたりけ

れば、ことによるこばせ給ひて、御室の中に加へて、鳥羽の宝蔵に納められにけり。

(注4) 六条修理大夫ろくでふのすかりだいぶ顕季あきすゑ卿きやう、やうやうにたびたび申し出だして、(注5) 信茂をかたりて、書写して持たれたりけり。さて、年ごろ、(注6) 影供えいぐをおこたらざりけり。

(注7) 末に長実ながざね、家保いへやすなどをおきて、三男あきすけ顕輔けんすけ、この道にたへたりければ、譲り得たるを、院にまゐらせたりける時、御感ありけるを、長実、御前に候ひけるが、そねむ心やありけむ、「人麻呂の影えい、それ益なし。めづらしき文あらば、色紙一枚には劣りたり」とつぶやきたりければ、院の御気色かはりて悪しかりければ、立ちけるを召し返して、「汝はいかでか、わが前にてかかることをば申すぞ。みなもと夢より起こりて、あだなることなれど、兼房、さるものにて、ことのほかに浮けることはあらじと思ひて、われ、すでに宝物の内に用ゐて、年ごろ経にたり。汝が父、ねんごろにこれを営みて、久しくなりぬ。かたがた、いかでかをこづくべき。かへすがへす

不当のことなり」とて、いみじくむつからせ給ひければ、はふはふ出でて、年なかばかりは門鎖かどさして、音だにせられざりけり。これにつけても、かの影の光になりにけるとなむ。

(注)

- 1 人麻呂：柿本人麻呂。「万葉集」の代表的歌人で、後世、歌聖と仰がれた。
- 2 西坂本：現在の京都市東部、一乗寺、修学院の付近。
- 3 白河院：第七十二代天皇。退位後、院政を執った。
- 4 六条修理大夫顕季卿：藤原顕季。平安時代後期の歌人で、白河院の近臣として活躍した。
- 5 信茂：巨勢派の絵師。
- 6 影供：故人の絵像を掛けて供物を上げること。
- 7 末：子孫。長実、家保、顕輔は、いずれも顕季の子。長実が白河院の近臣として権勢をふるい、顕輔は歌人として活躍して「詩花集」の撰者となった。

粟田讃岐守兼房という人がいた。長年、和歌を好んだが、並程度の歌も読み出すことができなかったもので、心の中でいつも人麻呂を祈念していたところ、ある夜の夢に、西坂元と思われる所に、木はなくて、梅の花だけが雪のように散って、大変芳ばしい香りが漂っていたのを、心の中ですばらしいと思っていると、そばに老人がいる（という夢を見た）。（その老人は）直衣に薄紫の指貫、紅の下袴を着て、糊のきいていない柔らかな烏帽

子をかぶって、烏帽子の後ろは、非常に高く、普通の人とは異なっていた。左の手に紙を持って、右の手に筆を染めて、何かを考えている様子である。不思議に思って、「誰だろうか」と思っていると、この人が言うには、「長年、**人麻呂を心にかけていらっしやる、その気持ちが深いので、姿をお見せする**」とだけ言って、かき消すように消えた。

夢が覚めた後、朝になって絵師を呼んで、この様子を話して、描かせたけれども、似ていなかったもので、何度も描かせて、一番似ていたものを、宝にして常に拜んでいたところ、**その祈りのご利益であつたのだろうか、以前よりましな歌を詠むことができた**。何年か経って、死にそうになった時、白河院に（この絵を）差し上げたところ、格別にお喜びになって、お宝物の中に加えて、鳥羽離宮の宝藏にお納めになった。

六条修理大夫頭季卿は、色々と何度も（院にお願ひ）申し上げて、（絵を）お借り申し上げて、信茂に頼んで、描き写してお持ちになっていた。そうして、長年（頭季卿も）影供を欠かすことがなかった。

（頭季卿の）子孫に長実、家保など（がいるが兄たちを）差し置いて、三男の頭輔が**この和歌の道に優れていた**ので、（頭季から）この絵を譲り受けたが、（その絵を）院に献上した時、（院は）大変お喜びになったが、長実は院の御前に伺候していたが、ねたむ心があつたのだろうか、「人麻呂の絵は無意味である。すばらしい文章でもあれば、（その文章が書かれた）色紙一枚にかなわない」とつぶやいたところ、院のお顔の色が変わって機嫌が悪くなったので、（長実が）立ち去ったのを呼び戻されて、「お前は どうして私の前でこのようなことを申すのか。もとはみな夢から始まって不確かなことではあるが、（人麻呂の夢を見た）兼房は、**しっかりとした者で、とりわけ根拠がないことはないだろう**」と思つて、私は、既に宝物の中に加えて、長年経った。**お前の父は、心をこめてこの人麻呂の絵を影供して、長い年月になった**。あれやこれや、**どうして馬鹿にしてよいだろうか（いや、馬鹿にしてはならない）**。何度考えてもよくないことだ」と言つて、非常に不快にお思ひになったので、（長実は）言うように（院の御前から）抜け出し、半年ぐらい屋敷の門を閉ざして、音さえ立てずに謹慎しなされた。これにつけてもあの（人麻呂の）絵に華を添える話になつたということだ。